

佳 作 | 第一部門 |

障害を持って



京 都 府

原 節 子

私は、幼稚園から小学二年生まで、普通の子ども達と、一緒に、遊んだり、授業をしたりしていました。

三年生に進学してから六年生まで、国語、算数、理科、社会の四教科が、別の教室で、別の先生と、勉強する事になりました。

その時、なぜかわかりませんでした。

小学校に入り、二年生で、初めて、いじめを知り、いじめに会いました。

その時のいじめは、一人の生徒を下にして体重の軽い人から、順番に下になった人の上に乗る、最後に、一番体重の重い人が一番上に乗って、下になった人が、泣いて、くるしんでいても、気にしないで何度も、何度も、繰り返しました。教室に先生が、来ても、しばらくは続き、その後、授業が始まります。

二年生で私のクラスの先生は、余り注意をしない先生でした。

そのいじめは、必ずと言っていいぐらい授業の間の休み時間に起きていました。

でも、私に対するいじめは、少しずつなくなりました。

小学校を卒業して、中学に入り一年生の時は、私に対するいじめは、少なかったのですが、二年生の時、いじめは、ひどくなりました。

一年生の授業の途中から、特殊学級で勉強をする事になり、特殊学級と普通学級の両方で、授業をしていましたが、いじめを受ける様になりました。

今度のいじめは、言葉のいじめと、暴力のいじめを受ける事になりました。

それは、同じ女の子達に、急に呼び出されて、人の目につかない所で、張り手十発、殴られたり、私の友達の家と呼ばれ、そこで木刀で、殴られ、両手両足にあざを付けられ、右手のこうに切り傷ができました、皮が、めくれたりしていました。

クラブの時、他のクラブの人がきて、バトントワリングのバトンで両足を叩かれ、あざができました

体操服にチョークで背中から足にかけて、落書きをされたりしました。

いじめをしていた人達は、私を見ては、生意気だと決め付ける様になり、私はいじめを受け続けました。

その頃は、なんとか、普通学級と特殊学級と、二つの教室で勉強していましたが、いじめにたえられなくなり、特殊学級の二つ教室で勉強するようになりました。

それでも、いじめは、ひどくなる一方で、私は、精神的にも身体的にも、疲れてしまい学校に行こうとすると、途中の道から一步も進めなくなり、登校拒否をする様になりました。

学校の先生が、私の両親といじめた側の両親と子ども達に、連絡が入りました。そして、私の両親から、親戚の人に連絡が入り、親戚の人の家で話し合いをして、いじめた側の人に、あやまってもらい、もう二度としない様に話をして解決しました。

それから、いじめはなくなりました。

私が、障害を持っている事を知ったのは、中学校を、卒業する少し前で、特殊学級の先生の口から、告げられ、障害名と説明を受けました。

障害名は、精神薄弱児で、知恵遅れと聞きました。

説明は、

「普通の人より、勉強が遅れていて、なかなか、付いて行けなくて、付いて行けているのは、小学校の

四年生まででそこから、知恵の発育が止まっている」と聞かされました。

「でも、今から、特殊学級で勉強すればなんとか、普通の子ども達と一緒に勉強出来る様になる」と、言われました。

「障害の原因は、今だに不明で、研究されているけど、なかなか解明出来ない」と、告げられました。私は、すごくショックが大きかったです。

障害の事を、クヨクヨ考えてもしかたがないから、余り気にしない様にしていました。自分が、持つて生まれたと半分あきらめました。

それよりも、もっと考えなければいけない事があると思う様になりました。

それは、自分の障害と、どんなふうにつき合うか、進路を、どこにするかなどいろいろありました。中学一年の時に、屋外見学で養護学校の体育祭を見学に行きました。

その時、重度障害者の人達が、先生の手を借りて、競技を楽しんだり、精一杯走ったり、一人で、走っていたり、車椅子で走ったりしているのを見て、私は、感心しました。

その事を、進路の時に思い出して、自分の進路にしました。

私は、自分で、迷わず、養護学校を選びました。

なぜかと言うと、重度障害者の人達がみんな、生き生きとしていたし、一生懸命に自分達の力を、発揮して、いろんな事に取り組んでいたからです。

それを見て、私も、この人達と一緒にになって、自分の隠れた力を発揮して、頑張ろうと思ったし、重度障害者の人の為に、自分も何か出来る事が、見つからないかなあと思ったからです。

自分の力に、プラス出来る様な事が、見つかると思えば養護学校に決めました。

中学校の先生が、「それで本当にいいのか」と何度も、何度も、聞き直されましたが私は「いい」と答えました。

中学校を卒業して、養護学校に入学しました。

入学してから、二年間は、寮生活をしていました。

その時、初めて、重度の人と、接して見ると、違和感がなく、自然に対応出来、心を開いてくれる様な感じが、しました。

そしたら、重度障害者の人が、口では、言えないけれど、態度や行動で、表現する様になりました。例えば、トイレに行きたいと言う時は、自分の股に手をあてて、知らせたり、食事の時食べたいと言う時は、口に手を、持って行きたべる仕草をしたり、何か欲しい時は、ちょうだいと、手の平と平を合せ叩く仕草をしたりとさまざま、表現の仕方がありました。

また、遊んで欲しい時は、私の手を引っぱって自分の行きたい所やおもちゃを持って来て、一緒に遊んでいると、すごく満足そうに微笑みを浮かべたり、満足そうに、楽しそうに、笑ったりと、していました。

その時、私も、すごく嬉しく楽しくなり、重度障害者の人の気持ちと一つになれました。

高等部二年生になり、その時には、いろいろな事がありました。

それは、地域の取り組みに参加したり、いろんな普通校の人との、交流会に参加させられたり、クラス代表になって欲しいと言われたり、寮では、部屋の人達のまとめ役になったりしていました。

三年生の時は、もっといろんな役員になりました。

それから、地域の駅伝大会に学校の代表になって参加したり、個人的に、PTAの作文発表会に参加したり、京都で障害者の陸上大会に、かかさず参加したりしました。

もちろん、学校での勉強も頑張りました。

学校の時、タイムカプセルの中に入れる作文を書いたり、一生学校に残るといふ作文も書きました。

養護学校では、普通の教科と、性教育と、障害教育とさまざまな授業が、ありました。

障害教育というのは、いろんな障害者がいるので、その人達の障害の事を知る為に、勉強をして、対応のやり方や介護のやり方症状など、学びました。

普通の高校では、余り学べない事を養護学校で学びました。

いろんな事を学んだ後、進路学習がありました。

私は、企業就職をしたいと思いました。

人の為になる様な、仕事につきたいというのが第一希望でしたが、なかなか見つかりませんでした。

その後、第二希望として、電気関係で流れ作業ではなく、一つの事に集中して仕事が出来て、少しでも多くの数がこなせる仕事があればいいという希望でした。

それでも、なかなか仕事が見つかりませんでした。

後、少して卒業すると言う時に、仕事が見つかり、実習に行く事になりました。それから、実習が始まりました。

二週間の実習が終わり、学校に戻った時は卒業式の準備で練習に入りました。

卒業式の本番になり、卒業しました。

それからしばらく学校に遊びに行っていて、仕事が始まるまであと少しと言う時に、大きなケガをして半年間家にいました。

仕事に行き出したのは、良かったのですが、その時にいじめを受け、体力的にも続かずやめてしまいました。

それから転々と仕事をして、自分に合った仕事が見つかり、高校の時の第一希望が、かなったのです。でも、自分に大きな夢がありました。

介護福祉士を、目指していました。

ところが、病院のヘルパーだけでは、その資格は取れない事を知りました。

それからというもの、私は、病院の勤務を、惜しくも三年間で幕を閉じました。

その後、特別養護老人ホームに、勤め始めましたが、老人ホームの園生さんを、車椅子からベッドに、移行する時、その人の車椅子に付いていた、滑り落ち防止ベルトを外した時、自分の足の下にあるのを知らずに、園生さんを抱えた瞬間に、私が滑って尻餅を付いてしまいました。園生さんも転び、五針ほど縫うような、大ケガを負わしてしまいました。

私の方も、それから腰を痛めて病院に行きながら仕事に行っていました。

病院の先生から、「仕事をこのまま続けると腰の手術をしなければいけない」と言われ仕事をやめました。

障害者の人から、介護の依頼を受け、しばらくは続けていましたが、それも、やめなければいけなくなりました。

それからは、体力作りとスポーツに取り組んでいました。

その時に、いろんな障害を持っている人に、出会いました。

障害のある人達がたくさん集まるスポーツのつどいが、京都の府立体育館で毎週第二日曜日の昼からありました。

そこへ私も、ずっと通っていました。

その時、一人の障害者と出会いました。

その人は、男の人で、車椅子の人です。

いろんな話しをしたり、車椅子ハンドボールを初めて教えてもらっている内に、恋が、芽生え付き合い始めました。

付き合って半年位で、結婚の意識をし始めました。

男の人から、告白されました。

「大きな手術が残っているけれど、付いて来てくれるか」と言われました。

「こんな体だけど付いて来てくれるか」とも言われました。

私は、迷わず、とまどわなく、OKしました。

それから、九月頃から、私の親にないしょで、同棲する様になりました。

私の親に、男の人と私とで話しをしました。

それから、今年の六月、二十四歳で結婚する事になりましたが、私のお父さんは、式の三日前まで反対をしていました。

式の当日までお父さんが来るかわかりませんでした。

でも、きちんと来てくれました。

その男の人は、早くに家族を失い、ずっと一人でした。

小さい頃から、二十年以上病院にいて、その後、神戸の訓練校に行き生活出来る様に訓練をして、しばらくしてから、同じ神戸の職業訓練校にいて、京都に来て、住まいを捜して見つかり、京都に戻っ

て来たそうです。

その人は、結婚が出来ると思わなかったそうです。

結婚生活が始まりお互いの心の内を、話しが出来る様になりいろんな事が、わかる様になりました。

私の過去の事を、全部話しをしました。

私にとって恥ずかしい事や、辛かった事など話しをしたら、自分の心の中のもやもやした物が、スッキリした気になりました。

主人の心の内も教えてもらえました。

結婚してから、主人の膠着こうちやくしている足のリハビリをする様になり、もちろん家事もする様になりました。

今まで家事などした事のない私は、主人から一から教えてもらい、出来る様になりました。

リハビリは、私から主人に教えてあげてやっています。

リハビリのやり方は、病院に勤めている時、専門の先生から直接指導を受けたので、それに基もとづいて少しずつ無理のない様にしています。

すると足が、伸びて来ました。

主人も大変、喜んでいます。

主人は、両足が膠着こうちやくしているので車椅子の乗り降りの時に、今までは余分な力がいったけれど、今

はいらなくなり楽だと言います。

車椅子にきちんと座れて、背筋が伸びている様な気がすると言います。

そう言われると、私もリハビリのやりがいがあるのでとても良かったと思います。

いろんな、困難の壁に差し向うかもしれないけれど、二人で力を合わせて頑張って乗り越えたいと思います。

リハビリも、無理のない様に続けて行こうと思います。

何をするにも、続ける事が大切だから、続けて行きたいと思います。

原 節 子

昭和四十六年生まれ 主婦
京都府京都市伏見区

選評

この方の障害は知的障害とのこと。しかし読むうちに、知的障害とは何だろと思わされました。生きてきた記憶も鮮明だし、生きる上で、何を選択するか、その考え方も明確です。印象的だったのは、小学校のときからうけた数々のいじめに対して、ある寛容な精神が感じられることでした。そのやさしさが養護学校での重度障害者との交流の喜びとなり、車椅子の夫との生活にも進んだのではないのでしょうか。幸せな結婚生活をお祈りします。

(羽田澄子)